書　評

大学の講義と図書館との研究

Colleqe Teaching and the Colleqe Library

American Library association, 1959 pp.110

By Palricia B. Knapp

荒　井　貞　雄

この研究の目的は，(1)大学の各講座と学生の図書館の使用程度，(2)その使用図書の範囲，(3)図書館使用をはばむ要因，(4)図書館は大学の教育計画に何をなすべきか，である。

著者はノックス大学を研究対象として選んだ理由を次のように述べている。

1. 同大学は2千以上もある米国大学のうちで，学究基準から19番目に位される代表的な教養大学(Liberal Arts Callege)である。
2. 学生数738（男女の比は8対5），教員数74（その61%43名が博士号保持者）。21専攻科があり158講が（1957年春学期）開かれ，その選択は学生の自由というまとまった小さな学校。
3. 図書館の設備は独立の3階の建物と100余名の読書席。約79150冊の蔵書，300種の定期刊行研究誌及び600枚のレコードがあり，死蔵書は少い。運営は目録，分類製作者1名，参考文献，デスク奉仕担当者1名（以上正規の司書），その他に記録購入修理及び諸般の事務を担当する書記1名の計3名ですすめる。この他に常時、若干の時間アルバイト学生はおる。開館時間は

　平　日（月一金）午前9時一午後10時
　土曜日　　午前9時一午後5時
　日曜日　　午後1時一午後5時

指定書棚，貴重資料室以外は書庫，Browsin g室を含めてすべて開放。

著者は次のように研究を進めた。

1. 50名の教授助教授と長時間におよぶ個人面接により，講座の性格，範囲，方法，クラスのレベル，聴講生の数，図書館の使用，図書館員の役割，大学管理者の役割等と当該講座の関連性，さらに教員の意見，考え方等についての正確な資料の収集。
2. 大学教務員より，学生個々人の学業成績，人物調査資料，各講座と受講生のレベル等の資料の収集。
3. 図書館の図書を用うる学生について，目的，関連講座その他の諸事項を記入する質問用紙の収集。
4. 司書の仕事についての正確な資料と意見等の収集。

この研究は1957年の春学期間（4.5.6月），著者自身に依ってなされた。

次のような結果を得た。

目的の1，2は次の表の如くであった。

類　別	貸出単行本			題目による貸出		
	頻度	全体に対する%	一学生宛	頻度	全体に対する%	一学生宛
指定書	4,185	58.67	5.67	1,961	40.80	2.68
著書目録	251	3.52	0.34	228	4.74	0.31
目録に依らないもの	2,296	32.19	3.12	2,216	46.11	2.99
講座別計	6,732	94.38	9.12	4,405	91.69	5.97
講座に依らないもの	401	5.62	0 54	401	8.34	0.54
合　計	7,133	100.00	9.65	4,806	100 00	6.51

学生数は738名

上の表で自明の如く，94%迄講座に連結している。項目別の貸出においても92%という高率を示している。

使用図書を大別すると指定図書59%，題目図書においても41%を示している。このように高率使用は学生個人の意欲要求というよりは教授が示す，またはクラスに要求する研究基準によるものが決定的である。大きいクラスは概論的なものが多く，各学生に購入させ，精読させ，小さい上級生は専ら教授の指示に基き，指定されたものを広範囲に使用して研究問題を解決する。

3. 図書館使用をはばむものに (1) 特殊の専門図書の不足 (2) 司書の手不足のため，参考図書に対する充分なる奉仕の出来ないこと (3) 連絡不充分のため，講義の進捗度に照応した図書の準備の出来ないこと (4) 教授の図書館機能の認識の不足から来る諸現象 (5) 図書館を社交場と考える学生のために学究的雰囲気の破壊等があげられている。
4. 図書館が大学の教育計画になすべきことは，(1)奉仕司書は教授会に出席して会議の内容を認識する (2)教務事務の打合会には出席してその内容を常に認識すること (3)新購入図書を各教授に提示すること (4)各教授から指定される図書の量的準備を迅速にすること，また指定図書に準ずるものは教授に諮る (5)教授，学生の要求を充たすため購入，借入れの努力をする(6)図書館が大学の頭脳とし，学究の雰囲気をつくる工夫をする。

5. 最後に，最近オハヨウ大学，イリノイス大学等において，図書館協会が行った大学図書館についての研究文献表が記載されている。

わが国の新制大学制度は，戦後米国から輸入されたものである。その大学の現在の内容は，一部のものを除いて，米国の大学のそれとは驚くべきへだたりがある。その一面が，この図書館の使用にあらわれているといっても過言でない。無思慮に何もかも米国の大学に追従することは要らないが，大学の本質を考えるとき，学ぶべき多くのものがある。中央政府の最近の統計に依ると世界の150ケ国から92,000人の学生が，1,800の米国の大学及び大学院に学び，毎年20,000人が卒業して各自の母国に帰って行く由。その中で55%が極東諸国からであり，12%が欧州各国からだという。今や，米国の大統領は憶するところなく，「米国の最大の企業は教育事業である」と叫び，「1世紀前には米国は世界最大の教育輸入国であった。然るに現在は最大の教育輸出国である」と誇る。

(1965. 9. 25—相愛学園図書館長)

老化の心理

The Psychology of Aging

Prentice-Hall, Inc. 1964, 303pp
by James E. Birren, Ph D.

橘　　覚　勝

著者はその序言のなかで次のように告白している。「心理学的観点から，老化の過程について，全体としてできるだけ簡潔にかつあらゆる方面を網羅して敘述したもので，いわば発達心理学の一環としての成人の生活に関する心理学の教科書ともいうべきものである。専門的には勿論人生の老化過程とはいかなるものかを解明するところにあるが，それは所詮科学的な考察によって合理的に把握されたものでなければならないとして，できるかぎり従来の研究結果を参酌し引用して各章を構成した。新興科学の領域として，その具体的な資料は決して十分なものではないであろう。しかしかつては老人の生活に対する感傷やその生活価値の貧困から，科学的なアプローチはいずれかといえば敬遠されがちであったが，現在の社会情勢はかかる逃避や怠慢はゆるさなくなり，最近20年のあいだに，その科学的研究はめざましく発展した。いまそのあとをたどって本書を一応執筆した」ということである。

次に本書の内容について，各章別に摘記してみよう。

第1章　人生の時期の変容力理 (Dynamics of the Life Cyele) ——年令段階によって，社会的役割の変化と不安定，感情発動の変化，発達の不可逆性，各種観点からの年令段階，人生時期のダイミックス，相貌表出の変化，個人差の消長，突発的変貌等々の諸概念をあげて，第2章以下の考察の展開を示唆し，結局人生は生活環境の変化に対する適応如何に依存するという。

第2章　老化の社会的，文化的決定因子 (The Social and Cultural Determinants of Aging) ——老化の独立変数として経済的，社会的階層，民族性，人種性が論ぜられ，生命の長短や老人生活の類型はかかる因子にもとずくとして，アメリカ政府の医療保健統計，労働統計の結果を簡単に表示し，さらにSimmons の原始民族における老人の役割調査を引用している。

第3章　生物学的基礎 (Biological Influences) 老化および老年期の生物学的可能性を組織解剖学的に考察し，百才長寿の生物学的原理と由来をあきらかにしようとする。

第4章　各種感覚器管と知覚 (The Special Senses and Perception) ——中枢神経系統ならびに末梢感覚受容器管の老性変化，その構造の特殊化そして神経興奮度の低下は感覚的受容を年とともに減退させる。従って知覚的弁別は，高年者においては，若年者にくらべて余りに強い刺戟の場合は困難となり，かえって弱い刺戟の場合に可能である。

第5章　動作の速度ならびに時間調整と発達および老化 (Speed and Timing in Development and Aging) ——年とともに動作が遅延緩慢化するのは当然であり，動作の事態如何によらないのは必至である。若年者の場合はその条件事態の如何によっておそくなる場合もあれば速くなる場合もある。従って高年者においては時間的に制限のある動作や作業は困難であるとして，著者自身の反応時間に関する実験的研究の結果を多く引用している。

第6章　動作の熟練 (Psychomotor Skill) ——一概に動作といっても，衣食住に関する動作，交通機関の運転動作，職業における動作，運動競技における動作といろいろな面があり，それらの差異によって熟練度の発達のピークに年令的差異がみとめられる。著者はMc Farland, Welford, Lehman らの研究を引用し，運動競技の熟練のピークは22才乃至31才頃であるが，その他の種類の動作では，60才に達するもなおその減退をみないことを指示している。

第7章　学習 (Learning) ——老化の影響は学習